

福澤諭吉『帳合之法』に関する一考察

片岡 泰彦

I はじめに

明治の初め、日本の近代文明成立のために、最も早くそして最も大きな貢献を果たした先駆者の一人福澤諭吉¹⁾(1835~1901)は、「学問のすゝめ」「西洋事情」「文明論之概略」と並んで、「帳合之法」を著わした。この「帳合之法」は、アメリカの簿記書の翻訳である。したがって、単なる簿記技術の解説書のように思われがちであるが、それは大きな誤りである。

福澤が英文から翻訳した日本語は、単なる直訳ではなく、日本の習慣と風土に合わせた極めて解りやすい名訳となっている。しかも、福澤は、自分の近代的思想を、本の解説の中に取り入れたのである。

まさに、「帳合之法」は、西洋式簿記の日本における最初の文献であり、日本会計史上複式簿記の嚆矢と言うべきものである。

「帳合之法」は、「学問のすゝめ」とほぼ同時期に出版されたが、その内容を見る限り、両者は強く関連していた。²⁾すなわち、近代文明形成を目標とする精神は、両者に存在していたのである。

「帳合之法」が、果たそうとしていた目的は二つあった。第一は思想的な目的であり、第二は簿記技術上の目的である。思想的な目的は、近代文明をめざす企業家精神の向上であり、簿記技術上の目的は、実学としての西洋式簿記の日本語による解説である。そしてこの二つの目的は、密接な関連性を持っていたのである。

本稿は、福澤が翻訳の対象とした原書と比較しつつ、「帳合之法」における学問上の根本的精神と簿記技術解説上の内容を考案する試みである。

1) 原典では福澤となっているが、論文の標題以外は現代用語の福澤で統一した。

2) 故黒沢清教授は、「帳合之法」によって例証されたいわゆる「帳合学のすゝめ」は、「学問のすゝめ」の応用編にほかならなかつたというべきであると論述している。

黒沢清『日本会計制度発展史』財経詳報社、平成2年10月、70頁。

II 「帳合之法」における思想

福沢諭吉は、明治6年(1873年)6月と明治7年(1874年)6月に「帳合之法」を慶應義塾出版局より翻訳・出版した。この「帳合之法」の原典は、Bryant & Stratton's Common School Book-keeping, 1871, New York である。

明治6年版の初編二冊は、略式(single entry)を翻訳・解説し、明治7年の二編二冊は、本式(double entry)を翻訳・解説している。¹⁾

しかしこの文献は、上述したように単なる簿記の翻訳書ではない。福沢は、この翻訳書の出版をもって、日本に一つの新しい文化的精神を与えようとしたのである。その理由の第一は、英語からの翻訳ではなく、福沢の著書と言っても差し支えない程、よく咀嚼された日本語をもって執筆しているからである。福沢は、「帳合之法」を執筆した理由として、初編の序文で次の四つのことをあげている。もちろん、この部分は原文にはない。福沢自身の思想を解説したものである。²⁾

第一に、「古来日本国中に於て、学者は必ず貧乏なり金持は必ず無学なり、故に学者の議論は高くして口にはよく、天下を治ると云えども、一身の借金をば払うことを知らず。金持の金は沢山にして、或はこれを瓶に納(め)て、地に埋(め)ることあれども、天下の経済を学(び)て商売の法を遠大にすることを知らず。…省略…何れも皆商売を軽蔑して、これを学問とは思はざりし罪と云う可し。今此学者と此金持とをして此帳合之法を学ばしめなば、始めて西洋実学の実なる所以を知り、学者も自ら自身の愚なるに驚き、金持も自ら自身の賤しからざるを悟り、相共に実学に勉強して学者も金持となり、金持も学者となりて、天下の経済史に一面目を改め、全国の力を増すに至らん乎、訳者の深く願う所なり」。

福沢の説は、簡単に言えば、次の通りである。学者は高い議論はするが実学を知らず貧乏である。そして金持は金はあるが学問を知らない。しかし、商売も学問の対象であり、経済は賤しいものではない。学者も金持も実学を学べば、共に金持となり、学問を有することになる。そして実学こそ「帳合之法」というのである。すなわち、日本経済発展の基礎こそ「帳合之法」と言いたかったのである。

第二に、「都て、世の中の事物に就き、不便利を見出して、苦情を述ることは易けれども、其不便利を補ふの術は甚だ難し。諸方大家の帳合を見聞きするに何れも皆混雑多く、一商家の棚卸には店中惣掛りにて二箇月を費し、尚不分明なるもの多し。帳合の宜しからざる証拠なれども、今日に至るまでこれを改正したる者あるを聞かず。一家の不便利のみならず、天下一般の不便利と云う可し。今この訳書は唯西洋帳合之初歩なれば、固よりこれを以て、諸商賣の帳合を一変して全く世の不便利を除く可きに非ざれども、先ず此書を以て、帳合学の門に入り、次で二編の本式を学び、尚進(み)て其奥義に達することあらば、遂に全国公私の会計を便利にす可し。されば、此冊子、粗にして小なりと雖ども尚なきに優れる乎。」

現在、多くの大家で使用されている帳合之法（＝帳簿方式）は、混雑が多く、棚卸（＝決算）にも多くの時間がかかり、2ヶ月を要する場合もある。これは、国家全体の不便と言える。しかし、この自分の説く「帳合之法」を採用すれば、不便は解消し、全国における公私の会計は便利となるというのである。

第三に、「前条（＝2条）にも云える如く、古来日本にては学問と家業と互いに縁なく、学者は字を知るほど、益（々）高くして天にも登らんとし、無学の百姓、町人は益（々）軽蔑せられて地に入らんとするの勢いにて互いに近づくことなし。或は好事の百姓町人少しく書を読（み）て、学者の真似をするものあれば、無用の漢文詩歌にふけり物の数を知らず、金銭の勘定を忘れ、家業の便利には為らずして必ず身代を破るに至れり。…省略…数百年來和漢の学者先生が虚文空論に溺れて、実学を求めず、下民を愚にしたる罪と云うべし。実に歎息す可きことなり。右の次第に付、今此帳合之法を諸処の学校に用（い）て生徒の読本と為し、平民の子弟或は其学びしことを家に帰（し）て、父母に語ることあらば、父母も始（め）て洋学の実なるを知り、安心して其子弟を学問の道に入る者次第に多かる可し。然ば則この冊子は帳合之法を教えるのみならず、一般に学問の実学なる証拠を示して、^{あま}周ねく世人を読書の門に導くものという可し。和漢古文の空学者流が、人を愚にせし罪は深と雖ども、此一書の願力に由て、其罪業を消滅し、農工商三界の万靈に開知の功德を施すを得ん乎。」

この第三の理由の中で、福沢は、帳合之法の重要性とともに学問の本質を説き、さらに日本の階級制度をも批判するに至る。従來の学者が学ぶ和漢の書は、虚文空論であって、百姓・町人が学んでも、何の益がなく、身代を失う恐れがある。この帳合之法を、学校の生徒の読本として、学ばせれば、実学としての帳合之法の価値を知り、父母達も子弟を安心して、学校へ行かせることとなるのである。そして和漢の空学者達が、人を愚にした罪は深いが、この帳合之法の一書をもって、その罪を消し、農工商三界の万靈に功德を施すことができるというのである。

第四は、「帳合も一種の学問たるは、此訳書を見て既に明白なり。されば商売も学問なり工業も学問なり、又一方より論ずれば天の定則に従い、心身を勞して其報を得るものは商売なるゆえ、役人の政を為して月給を得るも商売なり、古の武士が軍役を勤て禄を得るのも亦商売なり。然るに世の人皆武士役人の商売を貴く思い、物を賣賣し物を製作する商売を賤しく思ふは何故ぞ。畢竟商賣を貴き学問と思はざりし心得違（い）なり。その心得の甚しきに至りては、一身の利害を忘るる者多し。試に一例を挙てこれを説かん。右に云える如く物を賣買製造するも商賣なり。武家奉公も商賣なり。先の十万石の大名の家を一商社とすれば、一年の利潤正米四萬石なり、一石三両の相場にすれば代金十二萬両、此内四分の一、即ち三萬両は社頭なる殿様の用に供し、残り（り）て正味の利潤九萬両とす。この商賣を為すに、上家老より下足輕小者に至るまで九千二百人の働（か）なかる可らず。…省略…」

第四の理由の中で、福沢は、まず商売も工業も学問であることを説く。そして天の定則に従い、心身を勞して報酬を得ることは商売なので、役人も古の武士の仕事も商売なのである。それを世間一般では、役人や武士の仕事を貴く思い、商業や工業の仕事を賤しく思うのは誤りであるとい

うのである。すなわち、商業も工業も、さらに役人も武士の仕事も、すべて商売であり、商売は学問であると説く。

そして、江戸時代の大名の家を、一商社に例え、米を金銭に換算し、総収入から利潤計算を遂行しているのである。

これは、実学としての商売の学問性を説くとともに、伝統的な士農工商の階級制度を痛烈に否定しているのである。

さらに、「今の士族は、軍役の勤もなく、勞せずして報酬を得るのは男子の恥づ可き所なり。然るを此の米に粘着して独立の活計を立てんとする者なきは果して何の心ぞや」この文章は、自らの士族出身の福沢が書いたことを思うと、その時代の矛盾を批判する貴重な意見と言える。

そして、「今この『帳合之法』は、此輩の人をして、学問の道より進（み）て商売工業の門に入り、独立の大志を起さしめんとするの趣意なり。」と記述している。これは、帳合之法こそ、勤勞の精神を起（こ）させる重要な学問と説いているのである。

-
- 1) 「帳合之法」に関する書誌学的研究は、故西川孝治郎教授の優れた研究があるので参照されたい。
西川孝治郎『日本簿記史談』同文館、昭和46年1月、212-246頁。
西川孝治郎『文献解題 日本簿記学生成史』雄松堂、昭和57年6月、4-15頁。
 - 2) 「帳合之法」の思想については、黒沢清教授の次の文献を、十分参照した。
黒沢清『職業会計人の実践哲学』TKC広報部、1986年5月、14-30頁。

Ⅲ 「学問のすゝめ」と「帳合之法」の思想上の類似性

「学問のすゝめ」は、明治5年2月から同9年11月までのほぼ5年間にわたり出版されたものである。

したがって、「帳合之法」初編出版（明治6年6月）の1年4ヶ月前に始まり、「帳合之法」二編出版（明治7年6月）の2年5ヶ月後に完成したものである。「学問のすゝめ」は、17編からなるたった161頁の小冊子である。しかし、その内容の改新性と豊富さは、大冊をも凌ぐもので、当時かなりの影響を世に与えたのである。もちろん出版部数も340万部に達し、大ベストセラーとなった。

そして、この『学問のすゝめ』の中に、『帳合之法』を重要視し、解説する箇所が多く見られるのである。そして、当時を代表する有名な2冊の大著は、共通の思想で連結していたことを、次に述べたい。¹⁾

「学問のすゝめ」は、「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと言えり。されば天より人を生ずるには、万人は万人皆同じ位にして、生れながら貴賤^{きせん}上下の差別なく、万物の靈たる身と心の働きをもって、天地の間にあるよろずの物を資り、もって衣食住の用を達し、自由自在、互いに人の妨げをなさずして各々安樂にこの世を渡らしめ給うの趣意なり。」²⁾という有名な書

き出しで始まる。

そして、「人は生れながらにして貴賤貧富の別なし。ただ、学問を勤めて物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無学なる者は貧人となり下人となるなり。」とある。

「帳合之法」でも、論述したように、福沢はまず士農工商の階級制度を否定し、学問の重要性を説く。学問を勤め、物事を知るかどうか、貴人か下人かを定める要素になるというのである。さらに「学問のすゝめ」第二編において、福沢は学問の本質について解説する。次にその大要を記述する。

学問には、無形の学問と有形の学問がある。神学、理学等は、形のない学問である。天文、地理、窮理、化学等は形のある学問である。

ただ、文字を読むことだけで学問とするのは、大きな間違いである。文字は学問をするための道具である。例えば、家を建てるのに^{つちのこざり}槌鋸が必要であることと同様である。^{つちのこざり}槌鋸の名を知るだけで、家を建てることを知らないのは、大工と言えないのである。文字を読むだけで、物事の道理を理解しない者は、学者とは言えない。すなわち、論語読みの論語知らずは、この人達のことを言うのである。経書史類の奥義には達しても、商売の法を心得て正しく取引をすることの出来ない者は、帳合の学問（帳合之法）に拙き人と言うべきなのである。世帯も、帳合も、時勢を察することも学問である。和漢書の書を読むことのみが学問というのではない。³⁾

ここでの学問の本質の解き方は、「帳合之法」の場合と同様である。学問には、いろいろな学問がある。例えば、世帯（＝経済）も帳合之法も学問である。そして、学問とはただ文字を暗記することだけではなく、その内容を理解しなければならないのである。

当たり前の事を言っているようであるが、必ずしもそうではない。徳川時代の学問と言えば、古事記、日本書紀、万葉集等の和書を誦ずることまた四書五経等を暗誦することであった。

そして、これらの学問には高い評価が与えられ、実学的な学問には低い評価しか与えられていなかったのである。

福沢は、この評価に対し、鋭い批判を加えたのである。従来の和漢学書を、十分理解もしないで、朗読し、暗記するだけでは、学問とは言えない。そして算学、地理、化学、経済、帳合之法等も独立した一つの学問なのであるというのである。

第14編「心事の棚卸」の中で、福沢は商売における棚卸、さらには人生における棚卸の重要性を説く。

「およそ商売において最初より損亡を企つる者あるべからず。先ず自分の才力と元金とを顧み、世界の景気を察して事を始め、千状万態の変に応じて或いは中たり或いは外れ、この仕入に損を蒙り、かの売捌に益を取り、一年または一ヶ月の終りに総勘定をなすときは、或いは見込みの通りに行われたることもあり、或いは大いに相違したることもあり、売賣繁劇の際にこの品物について必ず益あるものと思しものも、棚卸に出来たる損益平均の表を見れば、案に相違して損亡なることあり…省略…。故に商売に一大緊要なるは、平日の帳合を精密にして、棚卸の期を誤らざるの一事なり。」⁴⁾

商売を始めるに当り、最初から損失を計画する者はいない。自分の才能と元金を基とし、世の景気を考え商売を始めるのである。そして、1ヶ月または1年後に、棚卸決算を行い、帳合之法の中で損益の平均法を作成すれば、利益か損失かが明白となるというのである。ただし、福沢の考える所は、ここでは商売の棚卸のみではなく、心事の棚卸をも説きたかったのである。

すなわち、和漢洋の書を読んでも、天下国家の動きを知らないで、一家の生計に苦しむ者は、そろばんを持たないで商売をするようなものである。天下を修めて自分の身を修めることを知らない者は、隣の家の手帳に助言して、自分の家に盗賊の入るのを知らないのと同じである。物事には、すべて帳合（勘定のバランス）が必要なのである。

人生の中にも、帳合の思考が必要であって、この思考が欠けてはならないのである。

自分自身の人生に対し、自分は何をすべきか、何をしているかを常に点検し、自分の有様を明確にし、後の方向を決めることこそ智事業の棚卸というのである。

- 1) この『学問のすゝめ』と『帳合之法』の関連性については、黒沢教授も強く主張している。黒沢清著『職業会計人の実践哲学』TKC広報部、1986年5月。
- 2) 福沢諭吉『学問のすゝめ』岩波文庫、2000年10月、11頁。
- 3) 福沢諭吉『前掲書』19-20頁。
- 4) 福沢諭吉『前掲書』126頁。

IV 「帳合之法」の原著

福沢が翻訳・出版した「帳合之法」の原著は、Bryant, Stratton および Packard の共著による Common School 版の Bookkeeping ; embracing Single and Double Entry, New York, 1871年である。1)この原著については、すでに久野光朗教授の極めて詳細にして優れた研究がある。この研究書によると、原書には Common School 版、High School 版そして Counting House 版の3種がある。2)しかし、ここでは福沢が翻訳を遂行した Common School 版、1871年のみを対象として解説したい。

原著は、第1部の単式簿記 (single entry, ただし福沢は略式と訳している)、第2部の複式簿記 (double entry, 福沢は本式と訳している) と巻末の先生と生徒のための実務上の手引き (Practical Hints) から構成されている。第1部は、四つのセット (福沢は式と訳している) から成り立っている。

第1セットは、日記帳 (day book) と元帳 (ledger) からなる。日記帳では、左側に人名勘定、右側に商品勘定が示されているが、元帳では人名勘定のみが記録されている。

第2セットは、日記帳、元帳、現金出納帳 (cash book) そして資産負債表 (statement) からなる。内容は、織物小売業 (retail dry goods business) の取引を扱っている。日記帳は、第1セットと同様に、左側 (借方) に人名勘定、右側 (貸方) に商品勘定が記入され、元帳では人名勘定

のみが記録されている。第1セットと異なる点は、現金の出入を記入した金銀出入帳と資産 (Resources) と負債 (Liabilities), そしてその差額から資本 (Present Worth) を示した資産負債表を作成したことである。

第3セットは、日記帳、元帳、売上帳 (sales book), 現金出納帳 (cash book), 手形帳 (bill book) そして資産負債表 (Statement) からなる。内容は、組合企業の織物卸売業 (wholesale dry goods business) の取引が記入されている。³⁾

第4セットは、日記帳、売上帳、元帳、現金出納帳、曜日帳 (time book) そして資産負債表からなる。内容は、家具販売業 (furniture and cabinet business) の取引が記入されている。

第2部の複式簿記も、四つのセットから成り立っている。

第1セットは、日記帳、仕訳帳 (journal), 元帳の伝統的な三帳簿制からなる。さらに一般諸表 (general statement) として合計試算表 (Trial Balance, -Face of Ledger), 残高試算表 (Trial Balance, -Differences), 資産負債表, 損益表が作成されている。日記帳は、単式であるが、仕訳帳と元帳は、左側・借方 (Dr.), 右側・貸方 (Cr.) で区分されている。元帳の勘定科目には、人名勘定、商品勘定、受取手形 (Bills Receivable) 勘定、支払手形 (Bills Payable) 勘定、現金勘定、費用勘定等が記入されている。

第2セットは、日記帳、仕訳帳、元帳、精算表、試算表からなる。第2セットは第1セットの取引を引き継ぐ形式で開始される。したがって第1セットの資産負債表に示された諸資産と諸負債が、日記帳とさらには資本金 (Stock) を相手勘定として仕訳帳にまず示される。元帳には、資本金 (Stock) 勘定、受取手形勘定、人名勘定、現金勘定、商品勘定、支払手形勘定、銀行勘定、費用勘定、損益勘定、残高 (Balance) 勘定等が記入されている。

第3セットは、仕訳日計表 (journal day book), 元帳、合計残高試算表、損益表、資産負債表等からなる。元帳には、人名勘定、商品勘定、現金勘定、銀行勘定、損益勘定等が記入されている。この第3セットは、織物卸売業の取引が示されている。福沢は、この第3セットを日本語に訳さなかった。

第4セットは、仕訳帳、現金帳、売上帳、元帳そして合計残高試算表からなる。元帳には、人名勘定、受取手形勘定、現金勘定、支払手形勘定、利息勘定、費用勘定等が記入されている。この第4セットも、福沢は訳していない。

1) 筆者の所有する原書は、洋学堂書店、平成6年9月出版による復刻版である。

2) 久野光朗『アメリカ簿記史—アメリカ会計史序説—』同文館、昭和60年4月、287-288頁。

3) 久野光朗『前掲書』289頁を参照。

V 「帳合之法」における簿記組織

福澤諭吉は、原書を日本語に翻訳するに当たり、注意した点を、「帳合之法」初編一の中で次の

ように解説している。

1. この書は、原本の直訳である。ただしその国の人の姓名をそのまま訳しては、日本人の耳に慣れず、混乱を生ずる。したがって、日本人の普通の名前に置き替えたのである。例えば、Roberts, Rhodes は甲州屋に、Lauren Y. Thomas は相模屋へと替えたのである。
2. 原書の商品名も、日本人に解りやすいように、外国の商品名を日本語の商品名に置き替えたのである。例えば、Rio Coffee (リオのコーヒー) は上茶喜撰に、Best Black Tea (最高の紅茶) は、上茶玉露に替えているのである。
3. 商品(布)の長さについても、原書ではヤアルド(Yds.)を使っているが、翻訳では尺に置き替えている。
4. 原書にある「シングル・エンタリ」(single entry)は、略式に、「ダブル・エンタリ」(double entry)は本式と訳している。しかしこの訳は原書の意に叶うものではない。「シングル・エンタリ」は、一重に記すの意味であり、「ダブル・エンタリ」は二重に記すの意味である。しかし、この「一重に記す」及び「二重に記す」は、朝夕唱えるのに不便であることを恐れ、無理ながらも、略式と本式に訳したと福沢は解説している。

「帳合之法」の初編は、二冊からなる。

初編には、略式(単式)の例題が四式(=セット)示されている。第一冊目に第一式と第二式が、第二冊目に、第三式と第四式が示されている。すべて、原書からの翻訳である。

第一式は、日記帳と大帳(元帳)が、主たる帳簿である。内容は、7月1日から10日までの東京三田の福澤屋の商品売買の取引が記録されている。すべての英語の人名は、日本の店名に置き替えている。例えば、山城屋、大和屋、河内屋、和泉屋、大坂屋、伊賀屋他等である。大帳には、これらの人名勘定のみが記録されている。略式とは言え、大帳は原書と同様に、借(=借方)と貸(=貸方)が上下に記入されている。

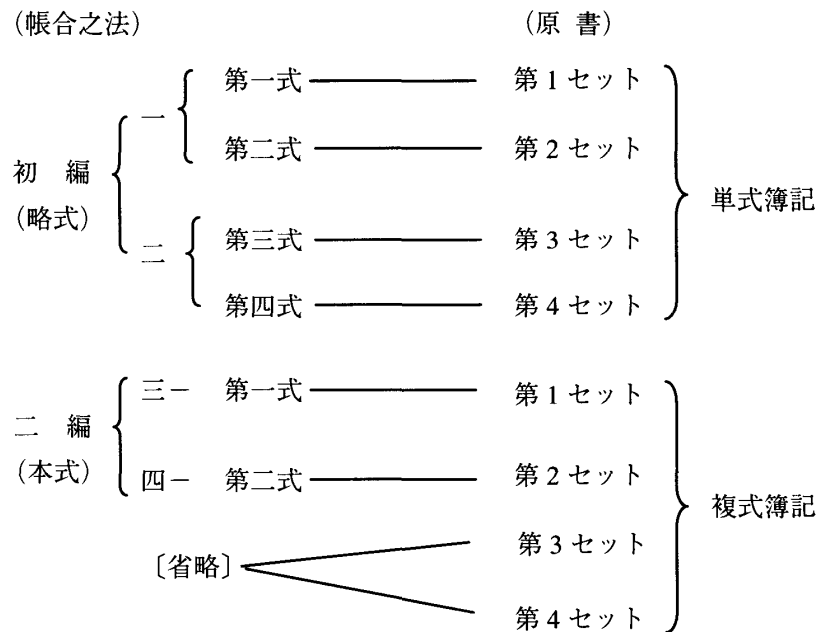
第二式は、日記帳、大帳、金銀出入帳、惣勘定(資産負債表)からなる。内容は、原書と同様に織物小売業の4月1日から28日までの取引が示されている。日記帳には、各取引が借と貸に分類して記入される。日記帳に記入された取引は、すべて大帳へ転記される。大帳には人名勘定のみが記入されている。人名勘定は、岩城屋、伊豆屋、野州屋、甲州屋のように、日本の店名に置き替えている。金銀出入帳には、有金(現金)の出入が記入され、最後に手許残金が算出されている。惣勘定には、大帳と金銀出入帳から集められた勘定と残高が集合されている。そして元手(資産)と拂口(負債)の差額から、現在の身代(資本金)が算出される。そして、現在の身代から最初の元金を引けば、商売によって得た利潤が計算されるのである。

第三式は、日記帳、大帳、売帳、金銀出入帳、手形帳、惣勘定(資産負債表)からなる。内容は、織物業の明治6年7月1日から7月31日までの売買取引が記入されている。大帳の勘定はすべて人名勘定のみで、原書でのBryant, Stratton, Penn, Lorenzo, Fairbanks等は、作州屋、備前屋、備中屋、備後屋等に置き替えられている。売帳には、現金と掛によって売上げた得意先ごとの商

品名、数量、金額が示されている。金銀出入帳では、現金の出入が示され、出入の差額は手元残金として、惣勘定の手元有金に転記されている。手形帳には、受取口手形（受取手形）と拂口手形（支払手形）が示される。惣勘定には、大帳、売帳、金銀出入帳、手形帳の借と貸の合計金額が転記され、その借と貸の差額が示されている。惣勘定について、福沢は第三式の末に於て商売の有様を示すものなりと解説している。

第四式は、日記帳、売帳、大帳、金銀出入帳、手有帳、惣勘定の帳簿組織からなる。内容は、福沢屋と丸屋が結合し、福丸商社を設立し、家用諸道具の4月1日から5月31日までの2ヶ月間の売買の取引を示したものである。

日記帳には、個々の取引が記入される。売帳には、得意先ごとに、現金または手形によって売上げた商品名、数量、金額等が示されている。大帳には、福沢屋、丸屋、中村屋等の人名勘定ごとに日記帳と売帳から、借と貸別に金額が転記されている。金銀出入帳では、現金の入（借）と出（貸）が記入され差額の出入残高が、差入手元有高として惣勘定へ移記される。惣勘定には、元手（資産）の各勘定と拂口（負債）の各勘定が集められ、「社中現在の身代合して」（資本金）が示されている。



「帳合之法」の二編も第三冊目と第四冊目の二冊からなる。

二編には、本式（複式）による例題が、第三冊目に第一式、第四冊目に第二式が訳されている。原書の複式簿記の第3セットと第4セットは翻訳されていない。

本式の最初に福沢は、日本語の英文の訳例を示している。帳合之法にはないが、原文の英語もあげておく。

- 帳合 ブックキープिंग (Book-keeping)
- 帳面 ブック (Book)
- 畧式 (単記と訳すもよし) シングル・エンタリ (Single entry)

本式（復記と訳すもよし）	ドッブル・エンタリ（Double entry）
借	デビト（Debit）
貸	ケレヂト（Credit）
取引	トランスアクション（Transaction）
商売	ビジネス（Business）
勘定	エツカラント（Account）
差引又は掛	ヲヌ・エツカラント
元金	カピタル（Capital）
利足	インテレスト（Interest）
元入	インウエストメント（Investment）
日記帳	デイブック（Day book）
大帳	レジヤル（Ledger）
金銀出入帳	ケツシブック（Cash Book）
売帳	セイルブック（Sales Book）
清書帳	ジョルナル（Journal）
仕入帳	インウエントリ（Inventory）
送状	インボイス（Invoice）
手形帳	ビルブック（Bill Book）
手形	ビル又は「ノオト」（Bill, Note）
商賣品	メルチャンダイズ（Merchandise）
平均又は残金	バランス（Balance）
平均改	トライヤル・バランス（Trial Balance）
元手又は手当	レソウルス（Resources）
拂口又は引負	ライエビリチ（Liabilities）
利益	ゲエン（Gains）
損亡	ロス（Losses）
平等付合	エクイリブリウム（Equilibrium）
平均表	バランスシート（Balance Sheet）
為替又は両替	エクスチャンジ（Exchange）

福沢は、略式と本式の区別を明らかにする方法として、初編の第三式と第二編の第三式（ただし第三式は訳されていない）を比較して見るように主張している。商売の取引が両式ともに同様なので、帳合の区別を見るのが易しいというのである。二つとも呉服問屋組合社の取引を示している点では一致している。そして略式と本式の大きな相違点は、略式は元手（Resources）と拂口（Liabilities）を記すのみであるが、本式は元手と拂口のみならず、利益と損亡の結果を記す

ことにあるのである。すなわち、略式には損益計算がないが、本式にはあるということが大きな相違なのである。

福沢は、次のように記述している。

「略式は元手と拂口とを記すのみなれども、本式は元手と拂口とを示して、兼て又利益と損亡の始末をも記せり、是即ち本式の大眼目なれば事に念を入るる人は必ず此法を用ひざるを得ず…」

本式（複式簿記）の第一式は、日記帳、清書帳（仕訳帳）、大帳（元帳）の三冊と、さらに平均之改—大帳の面を示す（合計試算表）と平均之改—借貸の差を示す（残高試算表）そして元手と拂口、利益と損亡からなる。日記帳には、明治6年1月1日から30日までの粉屋の売買取引の内容が、詳細に単式で記入されている。そこから清書帳へ、借と貸に区分して移記される。そして、大帳では、人名勘定、商品名勘定、正金勘定、請取口手形勘定、拂口手形勘定、雑費勘定等が、設定され、清書帳から転記されている。さらに、二種の平均之改（合計と残高）を作成し、帳合の正確性を検証している。元手と拂口では、元手（資産）から拂口（負債）を差引いて現在の身代（資本金）を算出している。そして、利益と損亡では、利益から損亡を差引いて、正味の利益（純利益）を算出している。

本式の第二式は、日記帳、清書帳（仕訳帳）、大帳（元帳）の三帳簿と、平均表（精算表）、平均之改、第二平均之改等からなる。内容は、第一式の記帳を引き継ぐ形式をとる。したがって、第一式の期末元手（資産）、拂口（負債）及び正金（資本）が第二式では期首の元手、拂口及び正金となっている。そして商売は利益を得た状態を示している。第二式が第一式と異なる点は、平均表（精算表）が示されたことである。この平均表には、平均の改（合計試算表）、仕入残高（棚卸表）、名目—損亡と利益（損益計算書）、元入（資本）、事実—元入と拂口（資産負債表）が記入されているのである。

福沢は、取引を仕訳する規則（Principles）について、原書からの翻訳によって解説している。

第一則 主人（The Proprietor）

商売（business）に元入金（investment）を出した主人は、元入金と利益（gain）を貸（credit）とし、主人の引請けた拂口（Liabilities）と商売の高から引去った金（all sums withdrawn from the business）と引請けた損亡（loss）を借（debit）とする。

第二則 正金（cash）

正金の勘定（account）は、請取った高（all cash receipt）を借とし、拂出した高（all cash disbursements）を貸とする。

第三則 品物（Merchandise）

仕入た品物の代金は借とし、売上げた代金は貸とする。

第四則 請取口手形 (Bills Receivable)

手形を請取ったとき、その高を借とし、手形を引替えたり又は他に用いたときはその高を貸とする。

第五則 拂口手形 (Bills Payable)

拂口手形の勘定は、金子引替きんすの約条書 (written promise to pay) を出したときは、その高を貸とし、引替えたときは借とする。

第六則 他人 (Persons)

銀行その他すべて私の方と取引する他人勘定は、その他人が私の方に対して債務を負っているか、あるいは私の方から他人への債務を返したときは借となり、また私の方が他人に対して債務を負うか、他人から私への債務を返したときは貸となる。

第七則 雑費 (Expense)

何等の名目であろうと費 (expense) は借とし、利を得るもの (producing us value) は貸とする。

VI 「帳合之法」におけるパチョーリ簿記論の思想

世界で最初出版された複式簿記に関する文献は、ルカ・パチョーリが執筆した「スムマ」すなわち「算術・幾何・比及び比例全書」(Summa de Arithmetica Geometria Proportioni et Proportionalita) である。この数学書は、1494年11月10日(または11月20日)にヴェネツィアで出版された。この「スムマ」は、308フォーリオ、616頁からなる大冊で、パチョーリ「簿記論」と呼ばれる部分は、第一部・第9編・論文第11の「計算及び記録に関する詳説」(particularis de computis et scripturis) というタイトルの197フォーリオ裏頁 (verso) から210フォーリオ裏頁までの27頁である。

このパチョーリ「簿記論」は、その後ヨーロッパ中に伝えられたのである。¹⁾

まず、ヴェネツィアでは、1534年にドメニコ・マンゾーニ (Domenico Manzoni) が、また1558年にはアルヴィーゼ・カサノヴァ (Alvise Casanova) が、パチョーリ簿記論に依存した簿記書を発表した。そして1543年には、オランダのジャン・インピン・クリストッフエル (Jan Ympyn Christoffer) が、アントワープでオランダ語とフランス語によって、パチョーリ簿記論を基礎とする簿記書を発表した。さらにインピンによる英語版も、1547年にロンドンで出版された。

また「幻の書」といわれているヒュー・オールドカースル (Hugh Oldcastle) の英語版も、1543年に出版された。

やがて、パチョーリ簿記論の英語版はアメリカへ渡る。そして、アメリカで生成・発展した簿

記書が日本へ^{もたら}齎せられたのである。この^{もたら}齎せられた簿記書こそ、ブライアン・アンド・ストラットン共著の簿記文献であり、この文献を日本語に翻訳し、出版したのが福澤諭吉の「帳合之法」と言えるのである。

ヤーコプ・ブルクハルト (Jacob Burckhardt) は、15世紀末までの数学と自然科学におけるイタリアの卓越した三人の人物として、パオロ・トスカネリそしてレオナルド・ダ・ヴィンチと並んでルカ・パチョーリの名前をあげている。

そしてリトルトン (A. C. Littleton) は、ルカ・パチョーリを近代会計学の父 (the father of modern accounting) と呼んでいる。²⁾さらに、「ある問題についてはじめて書いた著書がその後、その道の文献をかくも圧倒的に支配した事例はめったに見られないことである」³⁾とパチョーリの簿記書を絶賛しているのである。

この福澤の「帳合之法」も、イタリアのパチョーリ簿記論と同様に、日本における最初の複式簿記書として、その後の日本の簿記・会計史に極めて大きな影響を与えたのである。故黒沢清教授も「あたかもイタリアのルネッサンスの時代に、世界最初のルカ・パチョーリの簿記書が世に現れたのとほぼ同じ意義を明治初年の時代に示したものといっても過言ではないと考えられる」⁴⁾と主張されている。

「帳合之法」は、簿記論の解説書にすぎないが、その出版の意義は極めて重要である。日本における最初の複式簿記文献であるのみならず、その後の日本簿記書に与えた影響は極めて大きい。わが国に実務的かつ近代的学問観を生成させ、資本主義的経済への方向を決定づけたものと言えよう。そして、この「帳合之法」の簿記論の中には、パチョーリ簿記論の技術も、多く取り入れられているのである。例えば、「帳合之法」で解説された日記帳、清書帳そして大帳の三帳簿制は、パチョーリが論述した日記帳、仕訳帳そして元帳の三帳簿制をそのまま引き継いだものである。またパチョーリが解説した合計試算表及び残高試算表は、帳合之法で平均之改として採用されている。さらに、帳合之法で福澤が論述した勘定の学問、借と貸との事、仕訳の規則等は、パチョーリ簿記論の精神を受け継ぐものと言えよう。

-
- 1) パチョーリ「簿記論」については、拙著『イタリア簿記史論』森山書店、1988年、143-254頁を参照されたい。
 - 2) Littleton, A. C. Accounting Evolution to 1900, New York, 1966, p.3.
 - 3) 片野一郎訳『リトルトン会計発達史』同文館、昭和27年5月、8頁。
 - 4) 西川孝治郎『日本簿記史談』同文館、昭和46年1月、227頁。黒沢清『企業経営と複式簿記原理』昭和42年3月。

Ⅶ 「帳合之法」とウェーバーの資本主義の精神

かつて、故黒沢清教授は、福澤諭吉の「帳合之法」が含蓄するところの、日本会計史上におけ

る意義を、マックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」に比すべきものと評価した。黒沢教授は、「ここにいう資本主義の精神とは、単なる資本家的営利主義を意味するものではない。合理的な経営の原理にささえられた企業家精神すなわち資本主義の生活原理のエートスを指すのである」¹⁾と論述している。そして、現代会計学の基本概念を、あえて適用するとすれば、アカウントビリティ（＝会計責任）に他ならないと指摘したのである。さらに、「明治日本の近代文化形成の時代的背景として、プロテスタンティズムの倫理はそのまま通用しないことはいうまでもないけれども、福沢諭吉の思想的文化的役割を考えるならば、「帳合之法」とその思想的源泉となった「学問のすゝめ」とは、まさにわが国における近代資本主義の精神を多数の日本人の心に吹きこんだものと言うことができよう。」²⁾と主張している。

この福沢の「帳合之法」をマックス・ウェーバーの説と結びつけた黒沢教授の勇気ある発言には、驚きとともに敬意を表する。この発言の中には、「帳合之法」の中に秘められた日本における近代文明、ある意味では近代資本主義推進への思想を認めたものと言えよう。黒沢教授の説の正当性を検証するためには、ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」と複式簿記の関連性への検討が必要となろう。

マックス・ウェーバー (Max Weber, 1864～1920) は、資本主義の精神の思想的源流をキリスト教のうちの禁欲的プロテスタンティズムにおくのである。それは、ルッターおよびルッター派ではなく、カルヴィニズムおよびその周辺の流れ、それからもう一つの洗礼派の流れの信徒達の世俗的禁欲の中におくのである。³⁾

資本主義の精神は、キリスト教の反営利的なエートス (Ethos, 倫理的雰囲気, 思想的雰囲気) から生まれ、反営利の倫理に結びついていた世俗的禁欲が営利を許容し、資本主義の精神の一要素となるのである。⁴⁾すなわち、資本主義は、利潤の追求を目標とするが、ウェーバーの言う資本主義の精神は、利潤追求を敵視したカルヴィニズムの反営利的思想によって生長するのである。ウェーバーの「資本主義の精神」とは、資本家や経営者のみではなく労働者も含まれる。両者は、勤務時間中できるだけ楽に仕事をし、なるべく高い収入を得る等ということは考えず、労働が絶対的な自己目的、すなわち天職 (Beruf) として励むことが必要である。それは決して人間が生まれつき持っているものではなく、むしろ長年月の宗教教育の結果として生まれてくるものであるというのである。このような天職の意識を持った労働者が多数存在して、初めて資本主義的産業経営の成立が可能となるのである。⁵⁾

天職という語の中には、神の召命と世俗の職業という二つの意味がこめられていて、世俗の職業そのものが神からの召命だと考えている。そして世俗的禁欲と天職義務 (Berufspflicht) を同じと考え、資本主義を形成する不可欠な核としたのである。資本主義の精神のエートスは、禁欲的プロテスタンティズムが本来持っていた反営利的な性格に結びついて生まれたものである。

世俗的禁欲の持主達 (主として小商品生産者達) は、プロテスタンティズムの信仰を持ち、郊外から農村地域に広がっていった。このような人々は、神から与えられた天職として自分の世俗的な職業に専念したのである。彼等の目的は、富の獲得ではないので、無駄な消費はせず、結局

は金が蓄積された。そして彼らは自分で消費せず、隣人愛のために使ったのである。彼等の行動は、結果として、また意図せずして、資本主義の社会的機構を作り上げたのである。⁶⁾すなわち「近代資本主義の精神は、キリスト教的禁欲の精神から生まれ出たのだった」⁷⁾。またウェーバーは、複式簿記に対して極めて興味深い説を持っている。

ウェーバーによれば、資本主義経済とは資本計算を目標とする経済である。そして、企業の期末と期首の資本を比較し、その差額である利潤を大きくしようとする計算を資本計算 (Kapitalrechnung) と呼ぶとすれば、この資本計算を最高度に合理化させる計算こそ複式簿記なのである。さらに、この複式簿記の手段によって、近代資本主義の本質を理解できるというのである。⁸⁾ マックス・ウェーバーは、資本主義の精神の源を、カルヴィニズムの天職としての反営利的な禁欲のエートスに求めた。そしてこの資本主義の精神を基礎に発展した近代資本主義に不可欠な要素の一つとして複式簿記をあげた。

福澤諭吉は、徳川時代の封建主義から明治の近代化を進めるために、西欧の学問の重要性を説いた。そしてその学問の本質は、実学であり、その実学の代表こそ「帳合之法」と考えた。この「帳合之法」で解説された複式簿記は、その後の日本に大きな影響を与えるのである。⁹⁾

ウェーバーによれば、資本主義は、複式簿記と密接な関係を持つ。資本主義を生み出す手段として複式簿記は不可欠であったのである。

わが国でも、明治時代に資本主義は生成してくるが、複式簿記はその資本主義のために重要な役割を果たすようになる。福澤が蒔いた複式簿記の種子が生長し、やがてはその後の日本の資本主義に貢献したということは十分あり得ることである。

「帳合之法」を、ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」と比することも十分可能と考えられる。

1) 黒沢清『日本会計制度発展史』75頁。

2) 黒沢清『前掲書』76頁。

3) 大塚久雄訳『マックス・ヴェーバー、プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店、1988年5月、292頁。Max Weber, Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, Bd. I, 1920, SS17-206.

4) 大塚訳『前掲書』282頁。

5) 大塚訳『前掲書』290-291頁。

6) 大塚訳『前掲書』301-302頁。

7) 大塚訳『前掲書』267頁。

8) 青山秀夫『マックス・ウェーバー』岩波新書、昭和46年2月、112-113頁。

9) 「帳合之法」出版後の反響については、西川孝治郎『日本簿記史談』同文館、昭和46年1月、227-232頁を参照されたい。

Ⅷ あとがき

「帳合之法」は、アメリカ簿記書からの翻訳書である。初編は単式簿記の解説書であり、二編は複式簿記の解説書である。現代の会計から見れば、技術的には高い水準にあるとは言えない。

しかし、内容から見れば、単なる翻訳書ではない。福沢の著書といっても差し支えないほど、すばらしい日本語による簿記論の解説書となっている。その解説の中には、原書にない福沢独自の思想が述べられているのである。それは、徳川時代の封建制度を批判し、西洋式近代文明への発展を提言するものである。すなわち、江戸時代に重要視された和漢書の暗誦を主とする学問を虚文空論と喝破し、商業、工業、算学等を中心とする実学の重要性を説いたのである。そして、「帳合之法」こそ実学を中心であり、今後の日本経済発展の基礎となるものと考えたのである。福沢がほぼ同時期に著した「学問のすゝめ」と「帳合之法」は、学問に対する理論と実際という関係では一対となっており、同じ精神で結ばれていたと言えよう。

福沢は徳川時代の士農工商による身分差別を否定し、自由平等な人間関係の形成をめざしたのである。このことは、イタリアのルネサンス期に主張されたヒューマニズム（人文主義）にも相通するものがある。この人文主義とは、中世の神一辺倒の思想に対し、人間性の復活をめざすものであった。そしてこのルネサンス期の時代に出版された最初の簿記書こそ、ルカ・パチョーリの「スムマ」である。日本の「帳合之法」を、イタリアのパチョーリ簿記論と対比させることは、十分意義深いことと言えよう。